

夜も更け、夜半になると風雨の強さは極限に達し、ヒューン、ヒューンと笛のような高い音色を混え、益々勢を増してドゥンドゥンと巨大な怪獣が全力でぶつかって来るような物凄さです。

家族が皆で雨戸を押えていましたが、メリメリと裂ける音、ごうごうと風雨の唸り、ヒューンヒューンと笛のような高音、雨は容赦なく横なぐりに叩きつけます。風雨は益々激しく、家は大揺れに揺れはじめました。

雨戸を必死に押えていた家族は、雨戸と一緒に吹き飛ばされてしまいました。と同時に家は大きく傾いたと思うと、メリメリと裂ける音が激しくなってきました。

もうこれまでに皆が外に飛び出した途端ドサツという大きな物音をたて、倒壊してしまいました。

こうして死闘の一夜は終り皆力脱けし果然と立ちつくしてしまいました。母家は倒れてしまったが、厩舎は丈夫だからもちこたえて呉れるだろうと頼みにしていましたが、夜が明けて見ると、さしも頑丈な大きい厩舎も見事に倒れていました。

これで我家の立っている家は全く無くなってしまいました

した。さて母家の方ですが、畳はどうにか使用できるものがあつたので板を並べて畳を敷き一応寝る場所はできました。



出入口は、茅屋根の横を刳り貫いて作り、土間に竈を置いて炊事もできるようになり、こうして茅屋根に横穴を開けた土竜生活がはじまったわけです。

私はその年の十一月末に外地から引揚げて歸りこの土竜生活に加わりました。

したがってこの台風襲来の状況は実際に体験した家族の皆から聞いたものです。そしてこの土竜生活は四年あまり続けられました。

ほんとうに惨めなどん底生活でしたが過ぎ去ってしまったえば懐かしい思い出です。

この枕崎台風は家屋の倒壊、農作物の被害などもひどかったのですが、樹木の根倒しになったもの、幹からポッキリ折れてしまったものなどその惨状はひどいものでした。

特に雲雀山の二本松は、蚊口の弾琴の松と共に名物の老松として有名であり高鍋の人々に親しまれてきましたが、その高鍋のシンボル二本松も夫婦共々根元から倒れてしまい千年近いその生涯を終りました。その骸は蚊口の藤原製材所に横たえてありましたが、その幹は私達

の背よりも高く、いかに大木であったかを偲ばせていました。

またこの台風で、参勤交代の街道の松並木の巨木も姿を消してしまいました。

戦争によって痛めつけられ、更に二回の台風によって、被害を大きくされた住居や木々等でありました。

戦争中の衣食住

道具小路 松岡美也

何時の戦争にも負けたことを知らなかった我々は、世界第二次大戦にも勝つものと信じ、前線の兵士は勿論のこと銃後の国民も一丸いちがんとなって戦って来たと思う。

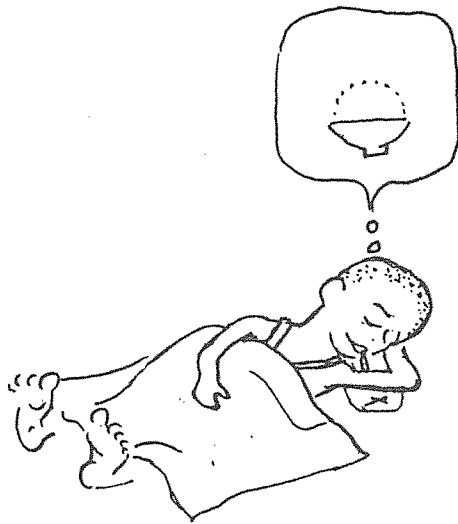
「欲しがりません。勝つまでは」を合言葉に、持てるエネルギーを戦争に注ぎ込んで来たのであった。こんな時、我々はどのような生活をして来たのか振り返り思い出して見たいと思う。

先ず食生活について思い出して見ると、主食は配給制度、年令男女別に配給量も決められ、米の代替として麦・麦粉、芋、戦争末期には砂糖まで代替食として配給されたこともあった。車のない時代これらの食糧を持ち帰るとき、嵩張かさばったり、重かったり難儀なことであった。

さてこのような食品を何に調理をすればお腹を満たすことが出来るか、特に発育盛りの子を持つ親の苦労は並々ならぬものがあつた。芋等をたっぷり入れたお粥かゆ、いろいろな野菜や、時には野菜のような物まで煮込んだ

雑炊ぞうすい、から芋だんご、だんご汁、澱粉でんぷんの湯がき等々と苦心したものである。

飽食の現代から見ると何ともまずい食べ物であろうが、こんな物でも美味おいしかった。



与えられたこれらの物を美味しそうに食べている子供、食べ終っても直には箸を置こうとしない発育盛りの子等を見る時親は辛かった。ただし人手不足の農家へ農作業の手伝い行って頂く白いおにぎりを手にした学童はギンメシと云って大変な喜びの様子だった。

こんな状態だったので必然的に農村地帯へのヤミ米の買い出しも行われた。折角入手した米も食糧法違反ということで取り上げられたこともあった。配給だけの生活をしていて餓死^{がし}された学者も居られたとも聞いた。

我家の幼児の皮膚病が栄養障害に因るものと医師の診断をうけたこともあった。何とか食糧をと、少しの空き地でも、又は学校などの片隅まで耕して食糧増産に利用したものである。

衣生活についてもやはり窮屈であった。衣料品とても切符制度で欲しい物を欲しいだけ求める事は出来ず、したがって手持の物で間に合わせることになり、布団カバーやシャツ等は子供の下着に、木綿^{もめん}やウール物等はモンペやシャツ等いろいろのものと変わって行った。

古物も大いに利用したが傷み安く、うす暗い明りの下

での繕い物等楽ではなかった。

非農家の人達の衣類は食料入手のため、次々と農村地帯へ流れて行ったものである。

住生活についていえばあの無気味な空襲警報の度に子供を連れ大事な物を持って、入ったり出たりしていた防空壕も、住居の一部といえたのかも知れない。夜の空襲は何とも無気味で、息をこらして解除を待つ時は生きた心地はしなかった。解除になった時のホッとした気持等は今だに忘れられない。

空襲に備えて電球は黒布で覆い、硝子は破片の飛び散るのを最小限に食い止めるためにと日本紙を張り付ける等生活は戦争のことで一杯だった。

子供や老人達は比較的安全地帯へ疎開させる等家族は分散して暮さなければならぬこともあり、辛い生活であった。

昭和二十年八月十五日、「国民にこれ以上の苦勞をさせるのはしのびがたし」との天皇の思召^{おぼしめし}により終戦を決議されたお言葉をラジオで聞いた時は我が耳を疑った程であった。

「今後の日本はどうなるのだろうか」不安やらあれ程苦勞して来たのにと情けないやら何ともいいようがなかった。

あれから約五十年日本国民は見事に立直り先進国となった。戦争はあってはならない。世界は平和でなければとつくづく思うことである。

打ちのめされた回想

後小路 上野 誠 三

戦争を回顧するとき、私は空襲と二・三年間続いた食料難を挙げる。鍋釜まで^{きよもつ}掘出して大砲にかえたり、若者は兵に、壮年男女は徴発され、全く嫌な時であった。現在の若い人々にはこんなことを言ってもわかってもらえないだろうが、私は私なりに回想してみたい。

戦争が激しくなってくると、各家庭に防空壕を掘り、各地区にも共同の壕・貯水槽を設けた。そして、バケツによる消火訓練・敵に向かっての竹槍訓練・灯火管制・在郷軍人は射撃訓練と軍の使役^{しえき}に自分の仕事は全く手につかなかった。やがて、内地でも空襲が始まり警報のサイレンは日に何回も鳴り響くようになった。

宮崎県も昭和二十年三月中旬から敵機の空襲を受けるようになり、高鍋でも鉄橋・アルコール工場・小丸橋等が狙われ、何回かの空襲で破壊された。

新田原には最後に戦闘機を伴い爆撃機が来て時限爆弾を投下、飛行場は機能不能となった。我々町民は空襲の

度に切齒扼腕、今に日本機の迎撃を待ち望んだがこれもかなわず、「残念無念、国敗れたり」と諦める外はなかった。

広島・長崎に原子爆弾が落とされ、重大放送で玉音を聞いたときはただただ涙あるのみ、張りつめた気持ち裂ける思いであった。

空腹も忘れて戦ったのに一気に空腹を覚え、明日からの生活をいかにすべきか心配でならなかった。食料あり、闇横行が二・三年は続くであろうと思った。

町の者が衣類を食料に替えボロ衣をまとい、農村の者が美衣を着て共にお腹を空かす時代となった。食料その他必需品はすべて統制下のため、闇取引なしでは米も手にはいりにくく、法を裁く立場の人が飢え死にしたとの報道を覚えている。

農村の患者さんが、「この米は筆筒の中に隠し持っていたものです」と言って持ってきてくれたときの嬉しかったのを覚えている。

下持田の農家で、人手が無く耕作出来ない田圃が二反歩あると聞き、町内の人に図り、二十人程の協力を

得て田植えから刈取りまで行った。汗の結晶で五十軒位に人頭割一升余りを分配できたことは嬉しかった。「トントントンカリ」の歌をきくたびに、一致協力して米を作ったことがなつかしい。（この米は統制外と認めてもらってやった）

終戦十日も経たないとき、米軍ジープ三台が私の家の前に止まった。案内して来たのは戦争中陸海軍の御用商人で顔見知りの男であった。「どうした」と聞くと、「鹿屋に進駐してきた米軍パイロットが近く米国へ帰るので別府に案内の途中である。高鍋まで来たが小丸橋が通れない。ちょうどお昼時なので、あなたを思い出して来た。昼食のため場所をお世話願いたい」とのこと、私は昨日の敵は今日の友とはいかないが、商人の早変わりにはびっくりした。しかし聞き入れざるを得なかった。米軍の来たことを知った隣近所では大騒ぎ、娘を押入れに押し込んで布団をかぶせたり、警察は遠まきに警戒した様子であった。

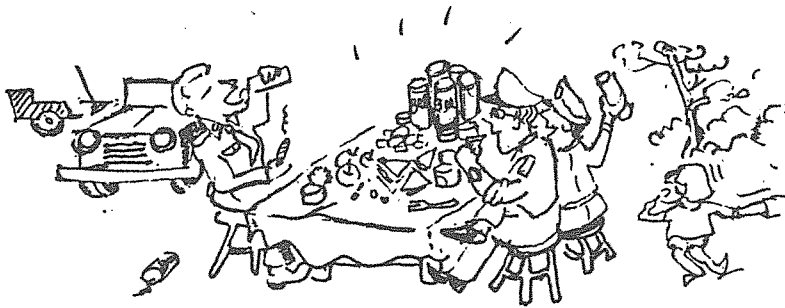
そして私の家に来たのは米軍パイロット将校三人・運

転士マリン三人・通訳一人・商人の八人、持参の食糧を開いて昼食が始まった。米製のビール・ピーナッツ・ビスケット・サンドイッチ・果物の缶詰・それに鹿屋に保管してあったらしい鯛の丸天大缶・ミネラルウォーター至れり尽くせりであった。

将校等は、女性が使っているようなコンパクトを取り出して顔を化粧けしょうしている。スポーツ後の一時ひとときといった感じがした。

日本の食糧難に比べ何たる違いかと驚かされたものである。

年は経て現在の日本は飽食時代である。衣食住・国民の半数以上が中流の生活をしているとのデーターも出ているようだ。これでいいのであろうかと私は思う。若者は都会へ農耕を嫌ってサラリーマンに、汗を流すことを止め、万事唯物主義と義務を忘れた権利の主張が目立つやに見受ける。ゴルフやらざる者は人に非あらずと背伸びして



追従ついでする必要はあるまい。健康で楽しく働く人であって欲しい。

戦中・戦後

宮越 河野花枝

昭和十二年二月に結婚し、その年の十月主人の転勤で鹿児島県肝付郡高山町へ移り住むことになりました。私にとって生まれて初めての異郷、西も東もわからない不安な毎日でした。

聞き慣れない薩摩弁で買物に一番苦労しました。しかし、近所の人達は親切で家族同様の付き合いが始まり長男、次男と誕生し、豆腐一丁八銭の時代で何の心配もなくのんびり楽しく過ごしておりました。

やがて、戦争が始まり、千人針の奉仕等に二人の子供を連れて歩き、出征兵士の家族にとっても喜んでもらいました。突然主人にも召集が来て七年間慣れ親しんだ土地を後に宮崎の赤江へ帰ることになりました。主人は都城連隊へ入隊し私共親子三人は主人の母と一緒に生活することになりました。義母は久し振りに孫の顔を見て、とても喜んでくれました。長い間、一人暮らしで農作業をしていた義母に変わり、私が畑に出かけ、義母が子守りを

するという毎日でした。やがて日増しに空襲が激しくなり畑仕事どころではなくなりました。防空壕造りには兄が来て、我家の天井板をはがし、壁板に使い頑丈に造ってくれました。朝八時頃になると、サイレンが鳴り出し、



米軍機の爆音が不気味に聞こえ、我家の上空を飛んでいきました。サイレンが鳴り出すと、「空襲警報！」と班長さんが、手作りのメガホンで一軒一軒呼び掛けて廻っておられました。子供達は、防空頭巾ぼうくうずきんをかぶりながら防空壕に走り込んでいました。赤江飛行場に近かったため、不安な毎日が続きました。爆弾が近くの墓場に落ち、防空壕の上を爆風が吹き抜けた時は「全員やられた」と思いました。しばらくは、「今日も一日命があった」と手を合わせる毎日でした。主人の便りでは、「友達は前戦に出発したが、僕は技術員として、福岡県太刀洗設営隊勤務に配属になったので安心する様」との事で一安心しておりました。間もなく終戦となり、主人も元気で我家に帰り、元の職場へ勤務出来る様になりました。

終戦になったと思っていたら今度は配給制度というもので悩まされました。私達は、配給制が廃止されるまで宮崎に居て農業を続け、何とか過しておりました。しかし子供がコッペパンをほしがるのには困りました。農家は食糧を作っているということで配給がない為知人に頼んでお米と引き替えにコッペパンを頂いたものです。今

考えるとおかしな話です。食生活も心配なくなった昭和二十四年、福岡で家族一緒の生活が始まりました。二年後延岡転勤、二十八年高鍋転勤、子供も落ちつかなかった事でしよう。長男が六年生卒業の作文に「小学校を四回転校し、辛かった」と書いており、本当に子供も大変だったなと思います。高鍋の地から離れまいと決心し宮越に住まわせていただくことにしました。

以後みなさんに一層親切にしてください、宮越の住民になれた事は本当に幸わせだと思っています。

お金では買えないたくさんの友達が出来、かけがえのない財産が出来たと私は思っております。

台湾引揚

下屋敷

柳

まつ子

戦争が終ったのが昭和二十年八月十五日、そして私共親子四人は八ヵ月後に台湾から高鍋へ引き揚げることになりました。

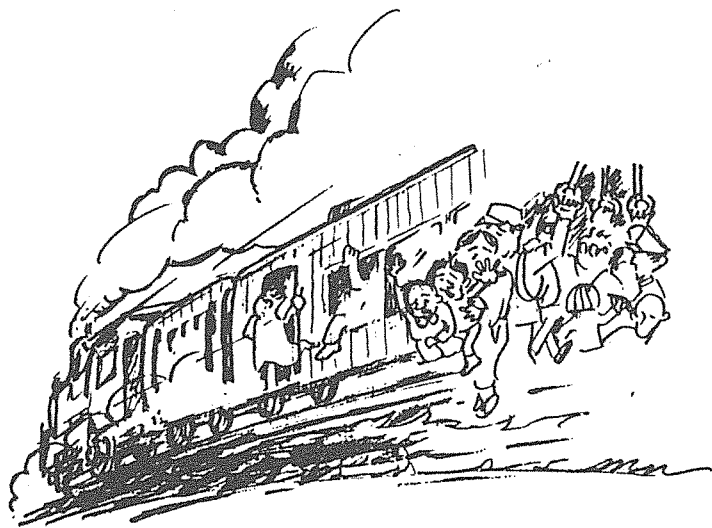
台湾でするので韓国・満州などのように途中の苦労はありませんでした。しかし、私は初めて柳の家族に会うのですから心細かったのを覚えています。

当時、私は二十八歳、子供は五歳と二歳、そして妊娠中でした。

昭和二十一年四月初め、広島の大竹港に着き、引き揚げ列車の夜行に乗りました。列車の中は立ちずくめの状態で、二歳の子供のだっこが手をかけなくても出来る程押し合いへし合いの超満員で、途中下車の人は窓からやっと降りていました。

高鍋駅に着くと、主人が筏の父のところに一人で行き、その間私共は駅の宿舎の井戸で顔を洗わしてもらいました。

しばらくして、乗合馬車に主人の妹が乗って迎えに来てくれました。昭和二十一年四月五日のお昼頃初めて会った義妹はグレーにえび茶の縦縞たてじまのモンペ姿でした。



筏の家では父と初対面のあいさつ、父が喜び迎えてくださった感激は忘れることができません。（母は以前に死亡）

妹は嫁に行っていました、家族は父と義弟三人、それに私共五人（生まれた子を入れて）の九人となり、当分主人は仕事もなく食べることに困りました。筏からは舞鶴公園が近かったので、毎日のように、石段の脇のつわぶき・みつば・よめな・野いちご等を取ってきては食べました。

今は、時季にはつつじの花が美しく咲いていますが、戦争直後には、あそこは自然そのままの城の跡で、私共に恵を与えてくれました。

高鍋は私にとって初めての土地です、方言も解りません。買い出しに行つて、隣りといつても遙か向こうなのに「隣に行つてごらん……」と言われ、一個の芋も手に入らず泣きなき戻りましたら、生後何ヵ月も経てない乳飲子が泣きじゃくつておりました。外者と見られたのでしよう。私は北海道生まれです、で致し方ありません。買い出しに行つたのは山手の方でしたが今となつ

てはどの辺かも覚えておりません。

食えることにはいろいろと工夫し、米糠・ふすま・野草なども食べました。澱粉の配給があると、麦から芋に澱粉を入れて堅めのご飯を炊き、五つの弁当につめました。

から芋のつる・床芋、種芋は私の家ではご馳走でした。また、天びん棒をかついだ魚屋さんから時たま求める魚もご馳走で、苦しい時代の思い出です。

落ちついたところは借家でしたので、家主が復員して帰られると家を出なくてはならず、そのうえ高鍋は、戦後の台風で家が倒れ借家もなく困りました。

主人もやがて県庁に勤めるようになり、高千穂に転じました。そして高千穂に引揚者住宅が出来ましたので、私共親子五人は昭和二十一年から二十二年六月までいた高鍋を、父と弟を残して旅立ちどうにか落ち着くことができました。

塩炊き

鳴野 森 昭 三

古老の言い伝えによると昔は鳴野には三ヘクタール位の塩田があつて地域の人々が塩を炊いていた時代があつたという。海水を引き入れた掘割が大正時代まで残っていた。その掘割は深さ五メートル長さ三〇〇メートル位の素掘りのものであり、この掘割から海水を塩田に引き入れて塩を製造していたのである。地名として塩浜の地名があつた。現在は台風のため破壊されて川の中になっている。

昭和二十年八月十五日戦争は終わった。（終戦記念日）そして日本は占領軍の支配下になり治安は維持されたが物資が非常に不足した。特に食糧が不足して野草まで食べた。そんな苦しい昭和二十年から、鳴野浜・蚊口浜・堀之内浜・永谷浜、の海岸で塩炊きが始まった。鳴野海岸には塩を炊く釜が三十カ所位造られていた。高鍋の海岸一帯に造られた塩釜はおそらく六十カ所以上ではなかったろうか。海岸は塩炊きの人出と塩を炊く煙でに

ぎやかであつた。塩炊きが最も盛んであつたのは昭和二十年から二十二年頃まででその後は塩釜はだんだん減つていき二十八年頃塩炊きは終つた。塩炊きに従事した人は地域の人が多く、炊いた塩は物々交換か、又は商人が買ってくれた。塩一升と白米一升と交換するぐらいの値打ちを塩は持っていた。



この塩を作るには海岸の砂地の所に先ず小屋を建て、必要な用具の保管と休憩所にあてた。釜はトタンを適当に曲げて長方形のものを造りそれを釜代用にした。釜をのせて炊く所を粘土と石で工夫して造りこれで塩釜の出来あがり。その塩釜の側には塩田を造り広いのは五アール位のもあった。晴天の日に海水を「たんご」で汲んで「ひしゃく」で塩田にかける。乾いたらかけて二回ないし三回位かけるとその砂の表面が塩で白くなる。そうになるとその砂をかき集めて海水をかけて桶にこすと濃い海水が出来る。その海水を釜で煮つめるのである。最初は火を強くして水分を蒸発させ最後の仕上げになるとろ火にして炊きあげると塩になるのである。

晴天の日に作った濃度の高い塩水を、翌日の朝から釜で一日中炊くと夕方には炊き上がり塩が出来た。一釜で塩が一番とれたときは一斗二升位であった。塩の出来高は各塩釜によって異っていたが少ない塩釜で五升から八升位、多い塩釜で一斗二升位の塩が出来た。（注・一斗は十八リットル）

塩炊きは朝から晩まで長時間海水を煮つめるのでたく

さんの燃料を必要とした。その燃料は戦争中海岸の爆撃によって枯死した松の木、未曾有の台風によって吹き倒された松の木と、小丸川の川上から流れてきた沢山の流木等が使用された。また持込み燃料も多量であった。

塩炊きは海水を煮つめるので海水の塩分の濃度の高い塩塩がとれる。小丸川の川口附近は塩の濃度が薄く、川口から遠ざかる程濃度が高かった。また時期的には夏の日照りを利用しての塩炊きが盛んであり出来上る量も多かった。

第七部 その他

韓国の人と共に

小丸 水町 幸子

戦時中、静かな農村だった川南の唐瀬原に、落下傘部隊飛行場建設のための請負工事に沢山の下請組がきていました。その一つの組に事務員として働いていた私は、一生忘れ得ぬ思い出があります。

私の勤めた事務室は韓国の人が多く、日本名になっている人は日本語も達者で達筆、若い私は優しくしてもらい仕事も楽しくしておりました。

ある日、韓国から都農へ慰問団が来ることになりました。韓国の人々はずっと前から楽しみにして仕事の合間には慰問団のことで話がはずむほどでした。私にも一緒に行こうとお招きがあり、見知らぬ国の唄と踊りを楽しみに待っていたものです。いよいよ当夜になりました。大型トラックに乗ってから都農までのみなさんのはしゃぎようは、まるで子供の遠足でした。いよいよ幕が開き、

あの色鮮やかな衣装に接した私は感激し、招待をいただいたことに感謝しました。

慰問団の唄と踊りに皆さんが泣き叫んで喜ばれる様子を見て私は胸の詰まる思いでした。異郷いきょうの地にあって同邦が相集あひつどい日頃の辛さを忘れられる民俗芸能を持つなんて素晴らしいと思いました。



同じ部屋の大学出の上原さんには、片言の日本語で優しく丁寧な言葉づかいをされる奥さんがありました。このご夫婦は韓国に子供さんを置いてきているので淋しそうでした。

キムチの季節となって野菜が出来る、私を呼んで一枚一枚の葉にあの独特な香料をはさみこむ方法をこ細かに教えていただき、かめに漬けこみ終わったときの嬉しさは忘れられません。

その他、韓国の料理もいろいろと教えていただき味の素晴らしさにびっくりしたものです。ただ異国で材料も思うように手には入らないご苦労を察し、私は揃えられる材料等は持っていてあげました。このことがお互いの絆を深くしていきました。

飛行場の建設工事も終り上原さんも次の仕事で川南を去られるときは本当に辛い思いでしたが、今となってはなつかしい思い出です。私は事務室が閉ざされると木城へ帰りました。

部屋の韓国の人達も、故郷へ帰られた方、下請の人と一緒に次の仕事へと行かれた方、高鍋に残って結婚され

た方といろいろです。

尾鈴山の緑を背景に、飛行機から二十・三十と降下しながら白く開く落下傘の美しさも、優しい事務室の皆さん方と一緒にだったからこそ素晴らしく見ることが出来たのでした。あの慰問団の韓国独特の民俗衣装での踊りを、もう一度見たいものです。本当に良い人ばかりでした。今ごろ、皆さん方はどうしていらっしゃるかと案じている私です。

靈魂^{れいこん}は帰^{かえ}つて来^きた

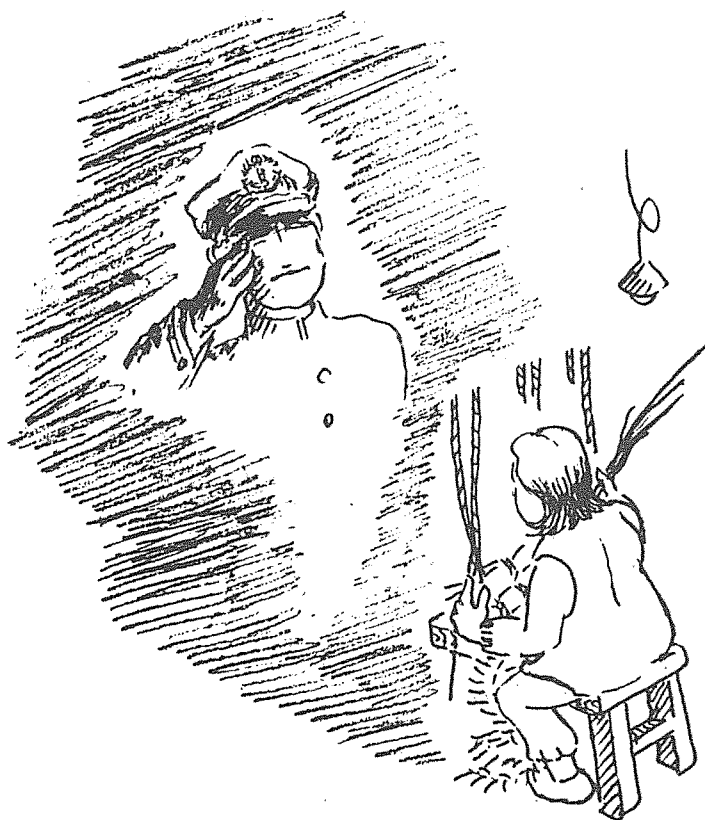
馬場原 後藤 ミドリ

昭和十七年十一月十五日、第二次大戦が始って一年目、第三次ソロモン海戦で戦死した一軍人の話です。

当時私には親同士で決めた婚約者がいました。彼は海軍の軍人で戦艦『霧島』に機関兵として乗組んでいました。だんだん戦争は烈^{はげ}しくなりましたがラジオ番組は日本軍の勝利ばかりを放送し、私達はそれを信じて銃後を守っていました。

ある日家の玄関の辺りで、何かをたたきつけたような音がしました。何かと外に出て見ましたが別に何事もなく一日が終り、眠りについた其の夜から彼の夢見が始まりました。毎夜のように「○○港に入港したので休暇で帰って来た」とか、ある時は「満期になったので帰った」とか、またある時は裏口から黙って入って来て仏壇の前まで来てそのままスーと姿が消えたり、こんな夢が丸一ヵ月も続きました。

当時私は、ムシロ機で毎日ムシロを織っていました。



そのムシロ機に掛けてある縄の向こうに昼間ありと下士官姿の彼の幻影^{げんえい}が見えるのです。歌にもある様に、「昼はまぼろし夜は夢」でした。

こんな毎日が一ヵ月も続いた十二月十八日の夜の夢の中で、「別府に入港したので面会に来い」という電報を受けました。

私は早速汽車さつそくに乗り、別府駅に降り立ちました。すると私の前に小さな火の玉が表れて、私を港の方へと案内してくれるのです。港に行ってみると人影はなく、あの広い別府の港に所せましと入っている軍艦がどれも皆傾いて波がザーザーと甲板かんばんを洗っていました。私はこれはどうしたことかと驚いているところが目がさめました。

その翌日十二月十九日の午後三時頃予期せぬ悲報に接しました。それは「南太平洋に於いて名譽の戦死をせり」というのでした。私はただ驚きで呆然ぼうぜんとしながら、それまで一ヵ月もの間見続けて来た夢と、幻影をふり返りながら戦死を彼の魂が知らせてくれたものと思えました。戦死の公報が来た時点で彼の夢も見なくなりました。遂に私達は結ばれる事もなく悲しみの中に彼の葬儀を執り行いました。

そして平成三年十一月十五日で五十回忌を迎えましたので、その日に彼のお墓に参り冥福を祈りました。

これでようやく私の戦後も終わった様な気がします。
長い長い戦後でした。

編集後記

高鍋地方に伝わる「むかしばなし」を、今まで第一集から第三集まで発刊しましたが、たくさんの方々に読んでいただいて厚くお礼申し上げます。

今回は、世界第二次大戦中・戦後にしほり個人の体験を収めることとしました。戦争を知らない世代の人々が多くなってきた現在の、あの戦争の悲惨さ、苦労等をまとめておかねば、やがて戦争の体験は風化してしまい、テレビによく出る「かつこよい戦争」の印象だけが残るのではなからうか。こう『ふるさとを伝える会』では語り合われ、町内の方々に体験記をお願いすることにした。

おかげさまで三十九編もの体験記をいただきましたが、それこそみなさんの血のにじむような戦中・戦後の生活の記録であり、読ませていただきながら涙いたしました。みなさんのご苦労の程がしのべれます。

戦争中お若かった方々も現在は高齢者です。「今、記録にとどめておかねば」という切実感から『ふるさとを

伝える会』の会員の方々はかけ廻り、体験記や体験談を収集していただきました。戦争中の話となると高齢者が対象でいろいろとご苦労が多かったとお察しいたします。ありがとうございました。

また、町教育委員会各課の方々、さし絵を描いていた中嶋さんに心から厚くお礼申し上げます。

編集者 岩村 哲雄

※ 収集協力者

(敬称略)

○高齢者ボランティア『ふるさとを伝える会』会員

(五十音順)

会長 森 仲吉(嶋野)

会員 上野 正英(下屋敷)

、奥村 ヤエ子(大工小路)

河野 花枝(宮越)

手塚 貞夫(蕨江)

財津 モトエ(川田)

西村 満(道具小路)

原 重隆(竹鳩)

林 ツタエ(中尾)

松岡 美也(道具小路)

三嶋 敏(羽根田)

※ 挿絵

中嶋 正夫(下屋敷)

※ 資料収集・調査・編集者

高嶋 傳(社会教育課長)

江川 雅章(社会教育課長補佐)

竹内 昭博(社会教育課係長)

岩村 哲雄(社会教育指導員)

